人知れず受け継がれてきた“寝技の柔道”が、今、脚光を浴びる

まるでサッカーのPK戦。“引き分ける”柔道は意外におもしろい！

一敗が一生の悔いに…

●七大学柔道大会ルール
（抽出な点のみ抜粋）

- 各大学15名による団体戦で争う戦。
- 試合時間は6分間。ただし大将ならびに副将の試合時間は8分間。
- 勝負は“一本”“技有り2回”を一方が取ったときのみ決する。それ以外は全て“引き分け”。
- “引き込み”が認められる。
- 選手の一方が足を踏ん張って、引き込もうとする相手の体を畳に浮かせた場合を除き、寝技の攻防で“待て”がかかることは殆どない。
- 寝技の攻防で場外に出た場合はその体勢を崩さないように審判（主審・副審2名）が両選手を試合場中央に戻して試合を再開する。同様に、立ち技で場外に出た場合も同じ組み手のまま試合場中央に戻って試合を再開する。
- 片襟をはじめ、自由な組み手が許される。

●決勝戦

○筑波大学		（一人残し）	北海道大学●
先鋒	松浦 元	白石	阿倉正二郎 先鋒
次鋒	神田 輝	中村	川本 明 次鋒
三鋒	武藤淳介	石川敏司	三鋒
四鋒	宮野 保	山田 剛	四鋒
五鋒	鶴田隆生	岡 宮武	五鋒
六鋒	中条敦男	乙坂豊嘉	六鋒
七鋒	後藤勝治	月橋博生	七鋒
中堅	大塚昭男	七尾和夫	中堅
七将	西田豊美	木村伸郎	七将
六将	武田 聡	山崎英樹	六将
五将	宮野博文	長谷	五将
四将	高橋広明	鶴口勝平	四将
三将	清水	三沢知美	三将
副将	山脇 修	大林孝之	副将
大将	青柳浩伸	三谷二郎	大将

道では一本を狙う柔道以外はあり得ないのだ。そこには、柔道がスポーツ化するなかで薄くなってきた、武道の匂いが漂っている。

当然、一本勝ちは外の勝ちはないのだから、ほとんどの試合は引き分けとなる。普通なら、それは競技をつまらなくするはずだが、大会は見ていて飽きないものだった。その秘密は団体戦だということにある。

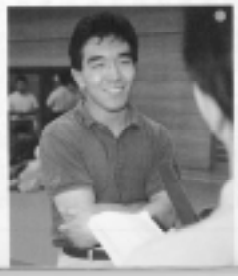
サッカーのPK戦を想像して欲しい。PK戦では、ほとんどキックがゴールを外れることがないからこそ、緊迫感がある。この大会のルールもそれと同じで、引き分けとなる確率が高いからこそ、2時間余りもかかる15対15の対抗戦の中で、一勝をあげたとき、或いは一敗を喫した時に受ける感激やショックの度合いが大きいのだ。

現に、今大会の決勝でも、双方13人目までが相譲らず。14人目で京大が一勝をあげた時、どれほど場内の興奮が大きかったことか！

逆をいえば、一敗を喫することは、その選手に一生消えぬ程の悔いを残すという。だからこそ選手はチームのために、持ちうる限りの根性を注いで、「引き分け」に持ち込んでいく。

『現代の柔道』は、体育との団結心を育む柔道でもあったのだ。（取材班）

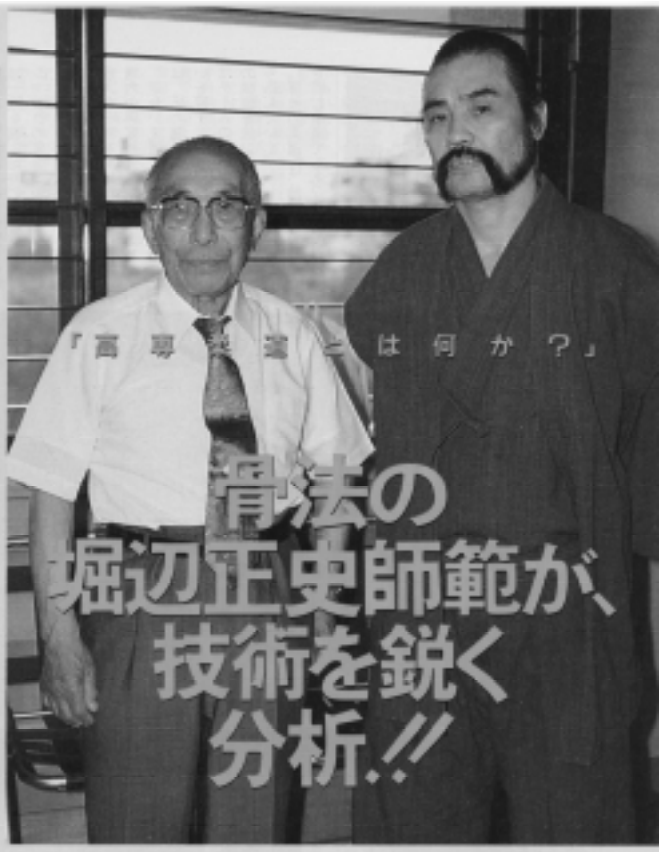
第44回国立七大学柔道優勝大会
7月1日～2日
東京・台東区レバーサイドスポーツセンター第一武道場



●北大の小人、●京大の小人、それぞれ選手？●ちょっとなった相手を思いそ始めると、「ていて技術の面白の味そと思く、●北大・本村主将と京大・岡田に対してからの会話をする前ていく、三角絞め、もっとと注意喚起で後ちとに秘ちのに、●北大のポイント・ゲッター、片桐・谷口、京大のポイント・ゲッターとしてしまうのある選手がいたにおれがれたれ注目は引き付けに持ちこむが、「ブラジリアン・ポイント・ゲッター（合理）に対し、京大のポイントゲッターとしてしまうのある選手がいたにおれがれたれ注目は引き付けに持ちこむが、「ブラジリアン柔術」で、京大・山崎と者に、組み込んで一本勝ち！　相手の技を受けて理の術を見出さ、「柔道」とはそもそもどこの技術？　七年間で一敗を喫することは、一生忘れられないほどの悔しさを残すとって、ていることに注目。●選手の一敗を喫することは、一生忘れられないほどの悔しさを残すとって、●北大の谷・山崎を引きずりだしに注目は、なんと三角絞めで一本勝ち。二勝をあげ殿堂入り。●選手の三敗、そして北大メンバー、●選手は決まった技術の三敗、そして北大メンバー、●選手は決まった技術の三敗、そして北大メンバー、●選手は決まった技術

前号で紹介した名大柔道部、惜しくも準決勝で敗退！

Q前号掲載・名大柔道部紹介のさ迷道編のいかがでしょうか、今回、高専柔道にスポットが当てられたのは、無論前号の「質問の仕方」をあらためて、高専柔道を見直すべき」という提案をもとに、名古屋道場を訪問したのが始まりだった。今号は、内容盛りだくさんゆえ、ページ数の関係上、スペースがオーバーしてしまうかもしれないが、ご了承願いたい。高専柔道の技術に触れて、高専柔道とは何か？



「高専柔道とは何か？」

骨法の堀辺正史師範が、技術を鋭く分析!!

高専柔道の技術については、講道館柔道と比較すると非常にわかりやすいと思うのですが、まず立ち技で、投げ技に違いがあることが、あらためてわかりました。

講道館柔道の投げ技は、重力に逆らって相手を投げ飛ばしています。つまり、相手を一回宙に跳ねる上げてから落とす。ロケットのように噴射を起こさせて、上に飛ばし、そして投げ飛ばす技になっています。だから、相手が盤面に叩きつけられた時に、威力があるわけです。

ところがこれに対して、ダメージの少ない「捨て身技」系や「巴き込み技」系といった投げ技があります。これは、重力に逆らわず、自分の体移動や崩しを使って投げる技です。

高専柔道の投げ技は、明らかにこの重力に逆らわない投げ技を主流にしています。これはグレイシー柔術も同じです。つまり、講道館柔道の投げ技のほとんどを、放棄しているのです。

その典型が〝引き込み〟です。人間は立って闘っても、いつかは必ず倒れるという論理は何度も説明してきましたが、これを重力に逆らわずに倒した方が、より簡単で身につきやすい。引き込みのように、相手の体を浮かせないで寝技に持ち込んだ方が楽なのです。

だから、高専柔道やグレイシー柔術は、重力に逆らうような、相手の体を宙に浮かす投げ技をほとんど使いません。より効率的に相手を引き込んで寝技に持ち込めばいいからです。

引き込みという技は、おそらく三段浮の失敗から生まれた技でしょう。しかし、たとえ失敗しても寝技に持ち込めるからいいではないか、という発想がもとで、この道館柔道と比較すると非常にわかりやすいと思うのですが、まず立ち技で、投げ技に違いがあることが、あらためてわかりました。

講道館柔道の投げ技は、重力に逆らって相手を投げ飛ばしています。つまり、相手を一回宙に跳ねる上げてから落とす。ロケットのように噴射を起こさせて、上に飛ばし、そして投げ飛ばす技になっています。だから、相手が盤面に叩きつけられた時に、威力があるわけです。

ところがこれに対して、ダメージの少ない「捨て身技」系や「巴き込み技」系といった投げ技があります。これは、重力に逆らわず、自分の体移動や崩しを使って投げる技です。

高専柔道の投げ技は、明らかにこの重力に逆らわない投げ技を主流にしています。これはグレイシー柔術も同じです。つまり、講道館柔道の投げ技のほとんどを、放棄しているのです。

その典型が〝引き込み〟です。人間は立って闘っても、いつかは必ず倒れるという論理は何度も説明してきましたが、これを重力に逆らわずに倒した方が、より簡単で身につきやすい。引き込みのように、相手の体を浮かせないで寝技に持ち込んだ方が楽なのです。

だから、高専柔道やグレイシー柔術は、重力に逆らうような、相手の体を宙に浮かす投げ技をほとんど使いません。より効率的に相手を引き込んで寝技に持ち込めばいいからです。

引き込みという技は、おそらく三段浮の失敗から生まれた技でしょう。しかし、たとえ失敗しても寝技に持ち込めるからいいではないか、という発想がもとで、この

このように、高専柔道はまず重力に逆らわない投げ技を多用するという特徴が、一番目にあげられます。これを私も再認識できました。

ところが、講道館柔道の投げ技の美学は、相手の体を宙に浮かす、重力に逆らう投げ技にあります。だから、高専柔道をずっと鬼っ子的存在として見なしてきたのも、よくわかります。

では、重力に逆らう投げ技と逆らわない投げ技はどちらがいいのか。これは習得度の問題なのです。

重力に逆らう投げ技は、習得するのに長い修行が必要です。また才能がものをいう場合もある。一人の人間の体重を宙に浮かせて投げるわけですから、何度も練習していないと試合では使えません。

修行という意味において、嘉納治五郎師範が意図に逆らう投げ技を重視したのも、そんな理由があるからでしょう。

ところが、重力に逆らわない投げ技は、誰もが簡単に身につけることができます。相撲部で試合にも使えるようになるのです。

ですから、どちらがいいかという問題は、長期間の修行か、短期間の修行かという違いで起こるわ

第44回国立七大学柔道優勝大会
7月1日～3日
東京・台東区レバーサイドスポーツセンター第一武道場

①対戦相手を強う相手を持ちあげた場面。こうすることによって唯一、横技の展開に「持て」がちかる。②右大の大内刈を（左）が、左大の抵抗に対し、引き込みを強す瞬間。③引き込みで横技にもちこむと、写真のような状態で相手の引きと、両脚の絡りによって圧力の選手を相手をコントロールしようとする。これ対（かいたい）と呼ばれる、高専柔道特有の技。④正面の攻撃から体勢を崩された左が、バラ逆いやカメになって守りに徹する。一度を取らなければいい柔道なので、ここからが根性のみせどころだ。⑤右大のポイント・ゲッター、山縣が横四方固めをガッチリ。この試合によって一位は左大は4人抜しのはず。名大は大将・3年生で主将を務める藤中幸雄（赤）が引っぱり出されたが、引き分けで左大は勝利が決定。ちなみに対戦もOKなのだ。⑥試合前と試合後、監督（手前・左）から今後のアドバイスを受ける。「1年間、もう一度、質とか量とかの内容とか、考え直してやっていきましょう」

●本間（左）と上野学生部長に訪れた。この他、柔道及び小・中クラスの、ST（プロ選手）の姿もあった。みんな聞くかあるのだ！
●学校関先生は、アラスカから帰国すると同時にこの合宿へ直行。最初の4試合だけを観ることができた。相変わらず熱心だ！

●準決勝
○京都大学（三人抜し）名古屋大学●
名古屋大は高橋選手、山縣選手がそれぞれ二人抜き。今年は日本一に輝く。

けです。また、修行という意味を抜きにして、実技にいく実用という点だけを考えたら、重力に逆らわない投げ技で十分なのです。

さて、実技に関してですが、今回、高専柔道の実技を見ていて、あらためて柔道の実技が他の格闘技に比べて実戦的であるかがわかりました。

なぜかというと、柔道の最大の特徴である抑え込みは、相手と対面しなければならないからです。

他のレスリング、サンボといった実技は、それほど対面することを重視していません。しかし、柔道は背中から抑え込んでも、抑え込みにならないのです。

これは、柔道の抑え込みに、昔の戦場での闘いは、最後は組み討ちになり、相手を抑え込んで小刀で首をかき斬るという発想があるからです。

もちろん、柔道にも「亀の状態」になることはあります。けれども、名大柔道部の全試合は、その亀とり返しを研究していながらも、自ら亀になることはいけないという発想を持っています。ここにも、柔道の実技がいかに実戦的、武道的であるかがうかがえます。

このように、柔道の実技は、相手と対面した状況での技術が非常に発達してきました。

たとえば、高専柔道では実技で下になった時、相手と自分の体の間にヒザを入れたり、スネを当てて空間を作り、ガード・ポジションをとる。高専柔道では、このガード・ポジションを「武対」と言いますが、実に足を有効に使いこなしていました。これはグレイシー柔術にもない高専柔道の特徴です。

グレイシー柔術のガード・ポジションは、下から相手の腰に胴が

らみのように足を巻きつけて深い密着をしますが、高専柔道では足を間に入れてそれほど密着していない。ここに二つの格闘技術の違いを見ることができます。

なぜ、このような違いが生まれるかというと、高専柔道は道衣をつけた同士の闘いだからです。道衣をつけていれば、相手との体に足を入れて空間を作っても、道衣をつかんで容易にコントロールすることができる。

高専柔道の抑え込みは、自分の胴体と足の使い方、そして、そこにいかに道衣をうまくつかんでコントロールするかという関係で成り立っているのです。

ところが、グレイシー柔術は、他流試合を想定しているので、相手が裸体であることも意識しなければならない。相手の道衣をつかめなければ、相手との間に足を入れて空間を作るだけでは、コントロールしにくいのです。

だから、より密着の深い胴からみを使う。胴に巻いた両足で相手をコントロールすることが重要な意味をもってくるのです。

また、何でも有りの場合、相手の胴体との間に空間を作ると、打撃を食らう可能性が出てくる。だから、より相手としっかり密着しておく必要があるのです。

それにしても、高専柔道の足の使い方の速さと巧用さは、大いに参考となるべきものがありました。また、そこから横四方固めに行く抑え込みのプロセスも、非常に面白かった。高専柔道は、いわば最終形を見て楽しんだり、勉強するものではなく、そこに至るまでのプロセスが大切なのです。

それがわかれば、より技術の時代を理解できると思います。（談）